

マックス・E・アマンの 世界馬術界展望

マックス・E・アマン氏は政治ジャーナリストから馬術界に転身し、障害飛越のワールドカップを創始しオーガナイズするなど馬術界に多大な貢献をしてきた人物だ。そのアマン氏が、世界の馬術界の過去から現在までの話題を縦横に語る。

プロライダーのジレンマ 国のため金のため?

ス

イスのザンクト・ガレンで主要なCSI O大会(障害飛越の国際大会)が今年6月に開催されるにあたり、その数週間前、スイスのトップライダーのひとりピウス・シュバイツァーがザンクト・ガレンの大会に出場せず、よりリッチな雰囲気があるドイッのハンブルクで行われるCSI O大会に出場すると決断し、これがスイス馬術界を揺るがした。多くのスイス人にとって自国の選手がスイスで唯一ネイションズカップが開かれるザンクト・ガレンの大会を放棄できることがショックだった。そうしたスイス人にとってホームグラウンドで開かれるCSI Oはスイスの全ライダー、とくにナンパーワンライダーこそが出場すべき大会という認識なのだ。

シュバイツァーを批評する者ももちろんライダーのジレンマは理解している。ザンクト・ガレンに対抗するCSI Oハンブルクは賞金額で知られるグローバル・チャンピオンズ・ツアーの会場のひとつだ。CSI Oハンブルクそのものは、CSI Oザンクト・ガレンより賞金額が少ない。しかし、グローバル・チャンピオンズ・ツアーは最終戦のアブダビで多額の賞金を用意している。このファイナルに出場するためにライダーたちはより多くのツアー内の大会に出場しなければならぬ。だからこそピウス・シュバイツァーがハンブルクになびいたのだ。

ザンクト・ガレンに出場しないというスイスに大きな波紋を広げた決断から数日後、ピウス・シュ

バイツァーは考え直した。明らかに彼の被った重圧は大き過ぎた。彼はザンクト・ガレンに出場した。ザンクト・ガレンにとって終わりなければすべてよし、だろうか。そんなことはない。すでに大きなダメージを与えてしまった。スイスのナンパーワンライダーにとって自国スイスでスイスの榮譽より賞金の方が重要であること示してしまったのだ。

スポーツの
商業化が
生んだ危機

いかなる形態においてもスポーツは特別な存在だ。その理想的な状況とは公正で誠実で、そしてクリーンであることに負う。このイメージが守られるなら、スポーツが本来あるべきスポーツとして見なされ、その結果として多くのファンを獲得し、人々に愛されるのだ。もしスポーツがこうした理想的な公正さや誠実さ、クリーンな状態からかけ離れたならば、その未来は危うい。この状況は10年前の自転車競技に当てはまる。ツール・ド・フランスに出場したほとんどの選手が違法な薬物摂取を疑われた時だ。

スポーツが完全に公正には成りえないことは明らかだ。その商業性、金がつねに何らかの影響を及ぼす。100年前からすでに薬物



ザンクト・ガレン大会に出場したピウス・シュバイツァー選手 ©Jacob Melissen

使用が見受けられた。しかし、20世紀中はスポーツが誹謗されるほどに過剰な影響を与えることはなかった。しかし、この10年で状況は大きく変わった。ツール・ド・フランスの起訴を含む薬物摂取嫌疑、選手と審判が賄賂を受け取り賭博元の求めに応じゲームを進めたサッカーの賭博スキャンダル、そして今も残る薬物問題——馬術

界では北京オリンピックの香港競技場で5ヶースが発覚——こうしたことがスポーツのイメージとスポーツへの関心に致命的なダメージを与えているのだ。

薬物乱用の危険と賭博に加え、社会的な影響を考えなくてはならない。それはスポーツファンと観客、さらに祖国を同じにする一般の人たちが優れたアスリートに対



し寄せる思いだ。どんな芸術家も科学者もビジネスマンもスポーツマンほどに同じ祖国を意識させることはない。アスリートの勝敗の結果にはつねにその出身国が記される。それが意味するのは、大きな大会やチャンピオンシップで選手たち国のために戦うことを期待されているということだ。

馬術界において、トップライダーが出場すべき大会のリストには主要なネイションズカップが含まれている。もちろん、すべてとはいえない。なぜなら、すべてのCSIOがメジャーであるとは限らず、世界的なライダーがこうしたネイションズカップに集まるとは限らないからだ。しかし、ネイションズカップが意味するのはホームタウン。スイス人にとってはザンクト・ガレン、イタリア人にはローマ、フランス人にはラポール、ドイツ人にはアーヘン、オランダ人にはロッテルダム、イギリス人にはヒックステッド、アイルランド人にはダブリン、スウェーデン人にはファルステルボの町がそれにあたる。ピウス・シユバイツァーが当初、ザンクト・ガレンに出場することを辞退する旨を表明したことは誤りであり、スポーツにダメージを与える結果となったのだ。ザンクト・ガレンは毎年この大会のために数百万スイスフランの予算を調達している。ザンクト・ガレンのこの資金のほとんどは二つある。ひとつはスポンサーシップであり、ひとつはチケットの売り上げだ。スイスのナンバーワンライダーがザンクト・ガレンを

無視し金が目的でドイツになびいたらスポンサーはなんと言うだろう。観客にとっても自分たちの最良の選手、ピウス・シユバイツァーが出場しない大会は落胆の種以外の何物でもない。ランチのソーセージだけで奉仕する何百人というボランティアの人たちのことを考えてみよう。自分たちの国で行われるもつともレベルの高い障害飛越の競技会、ザンクト・ガレンのCSIOに自国のトップライダーが参加しないとは。

絶妙のバランスで観客の期待に応える

プロのライダーが、ほかのプロアスリート同様に報酬を得なくてはならないのは当然だ。優れた馬はそれだけコストも掛かる。通常6、多くは7けたのスイスフランほど。トップライダーは高いレベルの競技会に出場するために20頭を抱える馬の厩舎が必要だ。これはグルームへの給料、食事代、住居費、交通費、保険などなど、毎月1978年のワールドカップが始まってから障害飛越への関心が高まり、それにもないスポンサー料が増え、賞金が倍増したの事実だ。ただし賞金とスポンサー料が高くなるにつれ、馬自体の価格も跳ね上がってしまった。

1964年のCHIOアーヘン大会でセンセーションを巻き起こしたアメリカの馬「ジャック・オア・ベティ」は10万ドルだった。この金額はローカル新聞の表紙で飾ったのだ。ところが今では10万

米ドルではジュニアライダー用の馬を買うにもおぼつかない。

これまでのことをまとめると、スポーツに対する一般的なイメージはとてどもデリケートであるということだ。すべてのアスリートが正当に生活のため、そしてスポーツを続けるために金を稼ぐ一方で、観客の期待に応えようとするときには難しい舵取りが必要だ。公正、誠実、クリーン、薬物不使用、その上、国への忠誠を誓うスポーツマンのイメージを保つため勝利という榮譽を持ち帰らなくてはならない。このバランスがネガティブな方向に傾くとスポーツの存続が危ぶまれることになる。2008年の香港で起きたドイツ人ライダーを巻き込んだ5つの薬物使用の例が思い出される。このときドイツのメジャーテレビ局に馬術競技の放映を続けてもらうためには多大な努力が必要だった。もし、このときドイツのテレビから馬術が消えてしまったら、スポンサーは手を引き、ドイツの馬術界と馬産に壊滅的な影響を与えたことだろう。

マックス・E・アマン

1938年、スイス生まれ。1964年に渡米しニューヨークの国連本部詰め外国人特派員として主に政治関係のジャーナリストとして活躍。69年に『スイス・アメリカン・レビュー』紙の編集長に就任。73年にスイスに帰国し、『ルツェルン新聞』に編集長として迎えられたことからは馬術競技観戦が趣味だったことから馬術関連の記事も手掛け、翌74年に国際馬術ジャーナリスト連盟(IAEJ)の会長に就任。78年新聞社を退社、以降、馬術のさまざまな大会でディレクターを務めるなど、多大な貢献をしてきた。